

〈史料紹介〉

# アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著 『高貴なる用語の解説』 訳注 (15)

谷 口 淳 一 編

## はじめに

本稿は、アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー (Aḥmad Ibn Faḍl Allāh al-‘Umārī) 著『高貴なる用語の解説』(*al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*) のアラビア語原典からの日本語訳注である。本稿では、al-Droubi の校訂本323頁13行目から335頁11行目までのテキストに対する訳注を掲載する。著者および本書などに関しては、訳注(1)の「はじめに」を参照されたい。

今回訳注を公刊する部分は、第7章「書簡の中でよく述べられる、用いべき形容辞」第1節「道具」第8項「遊戯具」から第2節「動物」第2項「栄光に満ちた野生動物」の「象」までである。ここまでと同様、各対象物に関する修辞に満ちた押韻散文の例が示されているが、これらの文例がどのような文書に用いられたのかという点については言及がない。

本稿の最初に当たる第1節第8項「遊戯具」には、双六(バックギャモン)とチェスについての文例が示されている。『高貴なる用語の解説』において、チェスはここでしか言及されていないが、双六は投石機に関する文例中にもみられ、投石機が城壁に向かって攻撃する様子が「投石機は城壁と双六遊びに興じた」などと描かれている[訳注(13):54頁]。

第9項「酩酊させる物とその器」には、酒とその器および大麻についての文例が収められている。酒についての二つの文例のうち最初の例は、酒が心にもたらす火、すなわち酩酊を「火を拝む者」(ゾロアスター教徒)や「イエスの民」(キリスト教徒)が尊重するかのよう

に記し、二つ目の文例は、酒を悪魔と結びつけた邪悪な物であるとしている。酒の器3種(杯、碗、水差し)に続いて「大麻に対する非難」の文例が示されている。その文章は、「明示的に禁じられていない」や「それ〔の使用〕に対してハッド刑を科す必要はない」という句を含み、大麻を非難しつつもその使用を事実上容認する内容となっている。前近代においては大麻の利用を明確に禁止する規定がイスラーム法に存在せず、エジプトなどでは半ば公然と利用されていた[「ハシーシュ」『岩波イスラーム辞典』]。この文例は、そのような状況を反映していると考えられる。

第2節は、さまざまな動物について述べた文例が収められている。第1項の題目は「騎乗用家畜」であり、馬、ラバ、ロバ、ラクダの4種類の家畜が取り上げられている。これらのなかで馬は別格である。馬に関する記述の冒頭でウマリーは「馬を称讃する形容辞は多く、書物はそれらに満ちている」と述べている。実際、ウマリーは、馬一般だけでなく「芦毛」

「青鹿毛」「黒毛」「鹿毛」「赤毛」「栗毛」「斑入り黄毛」「斑毛」という8種類の毛色と「側対歩の混血馬」の計9種類の区分についてそれぞれ文例を挙げており、馬に関する記述は校訂テキストで4頁余りに及んでいる。

馬の次にラバとロバの文例が続く。ラバの長所として、馬とロバの交雑種として馬の血を引いている点が挙げられており、ここにも馬の優越性がみられる。また、ラバはウラマーからカリフやワズィールに至る身分の高い人々が騎乗すると記されており、ラバが馬に準じる存在であることが伺える。一方、ロバについては「乗り手が讃辞を受けることはない」と評されているが、少量の餌で遠距離を旅することができるなど実用面の長所が強調されている。

ラクダの文例は騎乗用家畜の最後に配置されているものの、ひとコブ種とふたコブ種の2種について述べられており、馬に次いで多くの紙幅が割かれている。とくに、ひとコブ種はアラブ純血種とされるだけあって、それを称える文章には多くの詩人の名が織り込まれており、他の動物とは異なる印象を受ける。

第2項「栄光に満ちた野生動物」は、副題に「肉食獣とその他の動物」とあり、まず「獅子」「豹」「狼」という猛獣類についての文例が提示される。いずれも獲物に襲いかかる恐ろしい動物として描かれている。これら肉食獣の獲物として記されているのは家畜である。とくに狼については家畜を襲う様子が事細かく表現されており、牧畜者にとって狼が最も警戒すべき動物であったことが伺える。「その他の動物」の最初は象である。長い鼻と牙を持つ巨大な姿をさまざまな表現や比喩を用いて描いている文章が収められている。

これらの文例には、詩や『クルアーン』などの一節がしばしば引用されているが、一部の語順や語句が変更されている場合が多い。そのような場合を含めて al-Droubi が引用句の典拠を示している〔研究篇：292–296頁〕。本稿においても引用元を注記したが、引用部分が極端に短い場合などは省略した。訳文中にある〔 〕は、校訂本およびその底本であるL写本の頁表示と、原本に無い語句を補って訳した場合に用いた。また、原語の単語をローマ字で表記する際には、原則として辞書の見出しとなる形（名詞と形容詞は単数形主格、動詞は完了形3人称男性単数）で示した。節題や見出し、単数形にすると意味が変わってしまう語句などは、原文の形に即して転写した。

我々は、2003年7月から「イスラーム世界における書記とその伝統研究会」と称して、1年間に10回程度の研究例会（輪読会）を開催し、『高貴なる用語』を読み進めてきた。今回の公刊部分は、2023年6月から2024年5月にかけて実施した計11回の例会（第212回～第222回）で読んだ部分に相当する。この期間の研究例会で訳注作成を担当したのは、伊藤隆郎、岡本恵、近藤真美、笹原健、杉山雅樹、清水和裕、田中悠子、辻大地、柳谷あゆみ、横内吾郎（五十音順）と谷口の10名であるが、さらに篠田知暁が編集作業に携わった。訳語や表記の統一と最終的な調整および「はじめに」の執筆は谷口が担当した。

## 『高貴なる用語の解説』(15)

アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー

[txt. 323; ms. 140a]

第8項 遊戯具<sup>1)</sup>双六<sup>2)</sup>

それは、時を模し、1年の全てを形にしたものである。その駒<sup>3)</sup>はひと月の日数、その賽は、時の変遷における神の決定と予定の如く動く。〔二つの賽をふって最も出やすい〕賽の目<sup>4)</sup>〔の和〕は1週間〔の日数〕と同じく7である。[txt. 324]〔盤上の〕白と黒〔の駒〕は夜と昼のごとし。どちらも〔最初は〕欠けていて、完全になることが求められる<sup>5)</sup>。

その遊戯では、定めの時までの期間が形となっている。〔盤上は〕刻一刻と変化し、勝利以外をもたらしこともあり、必ず勝ち取れることもある。また、理由があることもないこともある。それは、アジャムの地平より昇ったものであるが、ただし、禁じられているものであり<sup>6)</sup>、燃え上がる火なのである<sup>7)</sup>。

チェス<sup>8)</sup>

〔それは、〕血の雨が降らぬ戦場。芦毛も黒毛も走らぬ馬場。戦車<sup>9)</sup>は対に置かれ、馬のための罾が仕掛けられ、歩兵の壁が広がり、[ms. 140b]王は鞍敷に座している。盤面では、思考が戦地に行き渡り、絶妙な序盤と臨機応変〔な展開〕をもたらし。その間、軍旗が掲げられ、火矢(zand)を射掛けあい、象が〔敵を〕恐れさせ、賢者は長が到達できなかった

1) ālat al-la‘b.

2) al-nard. 盤双六。現代の日本で一般的な絵双六ではなく、バックギャモンを意味する[“nard,” EI2]。

3) mahārik. バックギャモンで用いられる駒のことを、アラビア語では kilāb (kalb の複数形)、ペルシア語では muhra-hā (muhra の複数形) と呼ぶ。mahārik は辞典類には見当たらないが、ペルシア語 muhra-hā の転訛がアラビア語の複数形に擬した形になったものか。駒の数は、15個が2組、計30個である[研究篇: 292–293頁; “backgammon,” EI3; *Subh*, v. 2: 148]。

4) ḥaṣla. ḥaṣla とは、的の中心かその周辺に命中する行射のことをいう。ここでは、的の中心を示す印を賽の目の印とみなして「賽の目」と訳出した[Lane: 751; Kazimirski, v. 1: 583]。二つの賽を投げるため、出る目の数の合計は7となる確率が1/6と最も高い。

5) 相手の陣地のゴールに自分の駒15個全てを移しきると勝利となることを指している。

6) 後出のチェスと同じく、賭け事と結びつきやすいため、また、ゲームに時間がかかるために礼拝などにかかるべき時間を減じてしまうため、nard は禁じられた[“nard,” “shaṭrandj,” EI2]。

7) nard はイランを経由して伝わった遊戯であり、「燃え上がる火」はゾロアスター教の火を暗示しているのかもしれない。

8) al-šaṭrang.

9) ruḥḥ. ルークの駒のこと。上記訳文中には、チェスの駒の種類が全て登場している。登場順に、ナイトに相当する馬(通常は faras であるが、ここでは ḥayl)、ルークに相当する戦車(ruḥḥ)、ポーンに相当する歩兵(baydaq)、キングに相当する王(šāh)、ビショップに相当する象(fīl)、クイーンに相当する賢者(firzān) [“shaṭrandj,” EI2]。

ものに到達する<sup>10)</sup>。

## 第9項 酩酊させる物とその器<sup>11)</sup>

### 慣例となっている方法による酒の描写<sup>12)</sup>

酌人は酒杯を持ってまわり、革袋より黄金を注ぐ。そして〔また〕酒という太陽を封じていた封泥を開ける。〔酒というものは、〕正気に酒の狂気を混ぜる薬である<sup>13)</sup>。酌人は、〔txt. 325〕そのままでは制御できないため、水を混ぜて酒を飼い慣らし、優しく扱うことでそれを和らげれば、酒が寄り添ってくれる。酌人は、歳経ていない若い物を注いで<sup>14)</sup>〔心に〕火をつける<sup>15)</sup>。その火を、もしも火を拝む者が見れば何かを眩き、イエスの民（‘Īsawāi）が見れば聖なる物と見なすかもしれないが。

### 酒に対する非難<sup>16)</sup>

酒とは、悪魔がなみなみと杯<sup>17)</sup>を満たし、その代価として理性以外では満足しない物。その葡萄の蔓は、踏み惑いし者たちにしか蔭を伸ばさず、酒の本性は、混乱にのみ相応しい。タールで最初に黒く塗られた物は、酒壺の表面。酒席での友との交わりは、酔いによって悪くなる。古酒（ḥandarīs）の邪悪さ、また、泡が酒水の表面を覆っているのはイブリースの高御座だ<sup>18)</sup>というのは、周知のことである。

### 杯<sup>19)</sup>

杯は、縁が傾いた新月であり、夕焼けですっかり赤くなった地平線である。それは手の中で輝き燃える。杯は銀から、酒（rāḥ）は金からできている。それはまるで〔ms. 141a〕書記の手によるアラビア文字のヌーン<sup>20)</sup>の湾曲部のよう〔な丸みを帯びており〕、または燭台（ka’s）を運ぶ者が富を得る者となる鉱山のようなものである。

10) 「長」（qayl）はここでは王に同じ。現在のチェスでは、キングが八方に1歩しか進めないのに対して、クイーンは八方に歩の制限なく進めることができ、キングよりも動きの自由度が高い。ただし、前近代においては、クイーンに相当する賢者の駒は八方に1歩しか進めない点が、現在のチェスとは異なっていたとされる。この部分は、賢者の駒が王の駒と同じように動くことができることを示していると思われる [“shaṭrandj,” EI2]。

11) al-muskirāt wa ālāt-hā.

12) waṣf al-ḥamr ‘alā al-ḡāda al-mu‘tāda.

13) L 写本（底本）を含む複数の写本では「薬」（dawā’）を対格で読ませている。その場合、「封泥は、正気に染み込む狂気から〔守る〕薬である」と訳出できる。

14) 「注ぐ」と訳した iftaḍḍa には女性の純潔を奪うという意味があり、「歳経ていない若い者の純潔を奪う」という意味ともなる。

15) 「火」は地獄の業火を含意している。

16) ḍamm-hā.

17) 楽園にあるものを挙げる『クルアーン』78章32節以降のうち、34節を踏まえた表現。

18) 「覆っている」は ta‘rīš を訳出したもの。葡萄棚を作ることをいう。また、水の上に高御座（‘arš）があるイメージは、神が天と地を創造した時に水の上に神の高御座があったという、『クルアーン』11章7節にある表現を踏まえている。

19) al-ka’s.

20) nūn fī yad al-kātib. これは「書記の手中のヌーン」とも訳すことができ、その場合インク壺を指す。アラビア文字ヌーンは、インク壺を意味することがあった [Gacek 2001: 146]。

椀<sup>21)</sup>

それは隠された宝石からつくられ、雰囲気が形をなしている。葡萄の娘の深窓とされ、酌人がそれを持って回ると、〔酒を飲む者は〕くたびれていても安らぐ。水差しがその上で大笑いすると、椀は歌い、酒（mudām）の火花が飛ぶ。それゆえ、カダフと呼ばれる<sup>22)</sup>。

水差し<sup>23)</sup>

その席に水差しが〔空になって〕首を伸ばすまで残されることはなく<sup>24)</sup>、漉し器の頸静脈〔から注いだワイン〕で〔txt. 326〕その頸静脈を満たす。そして、水差しの大樹でナイチンゲールが囀り、その槍で憂いが貫き通される。眠っていた喜びが目覚め、水差しは爪先で立つ雁のように首を傾ける。水差しは〔座を〕回され続け、ついには中身が軽くなり、〔鳥が〕嘴でヒヤシンスを啄んだかのように、水差しにはその口の汚れだけが残る。

大麻に対する非難<sup>25)</sup>

それはただ、どのような場合でも称讃されることはない。たとえそれが土から生え、毒や体を弱らせるものを滅ずるとしても。明示的に禁じられてはいないが、それは不法であり、その茎を大事にする者がいるが、それは屑なのである。それ〔の使用〕に対してハッド刑を科す必要はないが、その害は数え切れない。それにはターズィール刑が科されるべきであり、その方がハッド刑よりも有効かもしれない。それを見て手を染める者は、それが本質的に穢れたものであること、それを喫するのはカラスのような黒胆汁が支配的なせいであることを知っている。それを喫する者は自らに進んで害をなしており、大麻を〔ms. 141b〕食べるのはロバしかいないのだから、獣も同然である。

第2節 動物<sup>26)</sup>

複数の項〔から成る。〕

第1項 騎乗用家畜<sup>27)</sup>馬<sup>28)</sup>

以下のことを知るように。馬を称讃する形容辞は多く、書物はそれらに満ちている。それらを見聞きすることが多く、ほとんど無知ではいられないほどである。馬（faras）に関する形容辞を列挙すると以下のようになる。

21) al-qadah.

22) qadaḥa は、火打石で火をつけるという意味であり、前文の「火花が飛ぶ」との掛詞になっている。

23) al-ibrīq.

24) 「首を伸ばす」(utli'a ḡīdu-hu) とは、水差し之首の部分の部分が空になるという意味、あるいは中身が空になって水差しが真っ直ぐに立てておかれるという意味と考えられる。

25) ḡamm al-ḥašīš.

26) al-ḥayawān.

27) al-ḥayawān al-muḡallal al-mu'add li-l-rukūb.

28) al-ḥayl.



馬の体軀 (ḥalq) が立派であることは建物のようであり、その身を翻す素早さについては、雲<sup>29)</sup>のようであり、その走りの力強さについては、鳥が飛ぶようである。頬の筋肉は薄く、〔txt. 327〕口の両端の間は広く、眼は突出し、瞳は鋭く、耳は尖り、脇腹は広く、胸は迫り出し、繫<sup>30)</sup>は短く、脚の腱 (nasan) は長く、背は低く、歩幅は広く、尻は大きく、尾は流れ、尾根<sup>31)</sup>は短い。蹄は固く、それが立てる音は乳搾りの椀〔の音〕のよう<sup>32)</sup>。皮は柔軟で、肌は滑らかで、油が注がれたかのよう。

最も飾り立てられた馬は芦毛<sup>33)</sup>で、最も忍耐強いのは鹿毛<sup>34)</sup>、最も速いのは栗毛<sup>35)</sup>、最も魂が鋭いのは黒毛<sup>36)</sup>。馬にはっきりとある白斑 (waḍaḥ), すなわち星<sup>37)</sup>と足白<sup>38)</sup>は、〔それぞれの性質が〕より強くなる〔徴である〕。それぞれに、純血アラブ馬 (‘irāb) と側対歩馬<sup>39)</sup>すなわち混血馬 (kadīš) の2種類がある。

馬について、以下のようなことが言われている<sup>40)</sup>。

我らは彼に馬を贈ったが、それらはいずれも風さえ適わぬ勝馬 (sābiq) であり、鳥はその後方で〔ms. 142a〕翼を切る<sup>41)</sup>。雲はそれと競うことを諦めたかのように、稲妻はそれと競走しても枷をはめられたかのように思われる。雷鳴はその後方で嘆息のようにしか聞こえず、その〔巻き上げる〕土埃で生じた夜〔のように暗くなった時〕には、胎児だけが昼を知る<sup>42)</sup>。

---

29) ‘anān. 第1母音を変えて ‘inān と読めば「手綱」という馬に関係の深い語となる。

30) waḣīf. 繫 (つなぎ) は、脚の球節から蹄の間の細い部分。なお、校訂本では waḣīf と綴られているが、L 写本 (底本)、Ld 写本 [f. 91a] およびペイルート版 [289頁] に従って waḣīf と読む。

31) ‘aḡm al-ḡanab. 尾根 (びこん) とは、尾の付け根の部分。

32) muḡabḡabu-hu ka-anna-hu ḡa‘bu al-ḡālibi. muḡabḡab は、動詞 ḡabḡaba (吠える、唸る) の受動分詞であり、「吠え声」「唸り声」を意味することになる。しかし、同語根の ḡabḡāb が木底の履き物を意味することから、muḡabḡab は木靴が発するような音と解釈し得ると考え、ここでは直前にある「蹄 (ḡāfir)」が立てる音とした。

33) aṣḡab. 原義は「灰色」。

34) kumayt. 色としては「黒みを帯びた赤色」[Lane: 2629; Watson 1996: 89]。したがって、黒鹿毛に相当するとも考えられる。

35) aṣḡar. 原義は「金髪色」。

36) adham. 原義は「真っ黒」「黒々」。馬の毛色を示す用語では青毛に相当するが、原語の意味を優先して、黒毛と訳すことにする。

37) ḡurra. 馬の額の白斑。

38) ḡiḡl. 馬脚の白毛。

39) ḡimlāḡ. 原義は「側対歩でゆっくり進む馬」。

40) 以下の文章は、何らかの文書からの抜粋と思われる。冒頭の「我ら」「彼」という代名詞がどいう人物を指すのかは不明。

41) 「鳥はその後方で翼を切る」(yaḡuṣṣu al-ḡayru warā’a-hu al-ḡināḡa) とは、勝馬と速さを競った鳥が敗北を認めるということを表しているのであろう。

42) 子宮の中で守られている「胎児」(ḡaml aw ḡanīn) だけが昼を知るということは、勝馬が巻き上げる土埃が空を覆い尽くし、誰もが夜と見まがうほどに暗くなってしまうということであろう。

芦毛<sup>43)</sup>

それは、その力を惜しみなく発揮する駿馬であり、その輝かしい今日を明日のための準備とする勝馬であり、あたかも昼がそれに外衣を着せたか、完全な満月がそれに器量の良さを認めたかのようである。それは銀から造り出され<sup>44)</sup>、その視線の光は目の黒さで保たれている<sup>45)</sup>。それには、同種の芦毛牝馬<sup>46)</sup>がいて、[txt. 328] それ以外〔の牝馬〕については、素晴らしい情報は伝えられていない。それについて素晴らしい情報が語られ、それが芦毛牝馬と呼ばれたまさにそのことゆえに、競走馬に選り抜きが存在すること<sup>47)</sup>が知られたのである。

青鹿毛<sup>48)</sup>

青鹿毛に乗れば目的地が遠いということはない。青鹿毛の毛色はアラブ人の血統〔を思わせる〕<sup>49)</sup>。覆いをつけた鼻先に白い花〔のような泡〕を吹きこぼし、緑の木から火を熾す<sup>50)</sup>。遠くに駆けたかと思えば近づき、速駆けで体躯を〔汗で〕濡らしたかと思えば、天の河に尾をたなびかせ、縄<sup>51)</sup>の結び目まで水瓶座<sup>52)</sup>をいっぱい満たす<sup>53)</sup>。その後には青鹿毛牝馬が続き、それは喜びを急ぎもたらし、〔青鹿毛の意味も持つ〕緑色を愛するウマイヤ家<sup>54)</sup>の弁明となる。

43) ašhab. 以下、毛色など馬の下位区分ごとに形容辞が示される。校訂本では、「芦毛」「青鹿毛」「黒毛」の冒頭は見出しとなっていない一方で、「鹿毛」以降は見出しとなっている。L 写本をはじめ諸写本には、すべての項目冒頭を見出しのように表示しているものが多い一方で、「鹿毛」の前後で表示方法を変化させているものはみられない。したがって本訳では、馬の下位区分の冒頭をすべて見出しとして表示した。

44) 「あたかも昼が…銀から造り出され」という部分は、芦毛の毛並みとその色の素晴らしさの描写であろう。

45) 「その視線の光は…保たれている」と訳出した箇所は、校訂本では wa-šīna min nūri al-bašari... とあるが、バイルート版 [290頁] および L 写本 (底本) を含む諸写本に従い、下線部を削除して読む。

46) šahbā'. ašhab の女性形。

47) li-ḥalbin zubdatun. ḥalḥ (競走馬) は、母音 a を一つ加え ḥalab と読むと「乳」という意味になる。一方, zubda には乳から採れるクリームという意味があるため、上記のように読むと「乳にはクリームが存在する」という意味になる。また、北シリアの主邑アレppoのアラビア語名は Ḥalab であり、その美称である al-Šahbā' は、上記のとおり芦毛牝馬をも意味する。この部分は、このような複数の掛詞が意識されていると考えられる。なお、辞書においては, ḥalḥ はター・マルブータを伴う形で「競馬のために集められた馬」という意味が示されている [Hava: 138; Lane: 624]。ター・マルブータを欠いた形は辞書には見出せていないが、集合名詞化ないし抽象化した形と解釈した。

48) aḥḍar. 原義は「緑色」。馬の毛色としては「黒みがかった土色」を表す。

49) aḥḍara al-ḡildati min bayti al-'arabi. al-Faḍl b. al-'Abbās の作品の一節を踏まえた表現。「青鹿毛の毛色」と訳した aḥḍar al-ḡilda は、アラブ人の肌の色を表す句で、「純血のアラブ」を意味する [Lane: 756]。ファドル・ブン・アルアッパースは、ウマイヤ朝のムアウィヤ 1 世やアブド・アルマリクと近い関係にあった詩人で、その曾祖父は、預言者ムハンマドと対立したことで知られるアブー・ラハブである [Tārīḥ Dimašq, v. 48: 335-336; "Abū Lahab," EI2]。

50) 『クルアーン』36章80節の「緑の木から、お前たちのために火を造りたもうたのも神」を踏まえた表現。

51) karab. 釣瓶の口の部分に、強度を増すためにつけられる縄 [Lane: 2602]。

52) dalw. 桶、釣瓶の意であるが、同時に星座としての水瓶座をも表す。ここでは前文に「天の河」という語があることから、水瓶座を指しているものと思われる。

53) 「縄の…満たす」は、ファドル・ブン・アルアッパースの作品の一節を踏まえた表現 [研究篇: 294頁]。

54) 「緑色を愛するウマイヤ家」とは、緑色がウマイヤ家のシンボルカラーの一つであることを示

### 黒毛<sup>55)</sup>

高みより見下ろすその額の星がもたらす恐怖が、一体どれほど敵どもに襲いかかり、沸き起こる雲を泣き叫ばせるものによって、一体どれほど嵐に打ち勝ったことであろう。黒毛は闇からその衣服を奪い取って、その新月を、四つの新月〔のごとき蹄〕をもって踏みしだいた。もし<sup>56)</sup>その騎手がアントラ<sup>57)</sup>の前に現れたなら、彼の身体 of 黒さは言及されないであろう。あるいは満月が黒毛の額の星を見たとしたら、夜に満月は銀貨のごときその胸にまでボタンをかけ〔て身体を隠す〕であろう。瞬くよりも早く黒毛がその限界にまで到達したとき、それは〔その時点での〕限界でしかなかった。黒毛〔のあまりの速さ〕で〔それに騎乗する〕喜びの期間が短くなるが、それについての心と視線の豊かさ<sup>58)</sup>は増す。〔ms. 142b〕その連れ合いには黒毛牝馬がいて、それによって災いが鎮まり、命が守られる。それが黒い色をしているがゆえに、それは駿馬の贈り物、若さの賜物であると宣言する<sup>59)</sup>。

### 鹿毛<sup>60)</sup>

一体どれほど、高き生者<sup>61)</sup>が、死なんばかりにそのようなものを望んだことであろうか。〔鹿毛とは次のようなものである。〕夜の暗さが黄昏の残照の上に帳を下ろし、薔薇色の地平線の上に麝香の粉末を振りかけた。それは満杯の飼葉袋でおとなしくなり、赤瑪瑙のごとくに形を整えられて、まるで牧草地のよう〔な毛並み〕になった。もしそれが頂点に達していないとしたら、それは〔鹿毛ではなく〕その兄弟である。そのつがいには牝馬がおり、新月が自らの蹄になれば満足しない。その色が鹿毛色であるがゆえに、その牝馬はその行いにふさわしかった。〔txt. 329〕

### 赤毛<sup>62)</sup>

それは、薔薇の枝から得られたもの、薔薇の枝木に見られたもののうちで最良のものである。赤毛は、その騎手たちが浴びた<sup>63)</sup>敵の血を纏った。速駆けで〔赤毛は〕汗をかき、するとそれから、滴の冠を被った薔薇が現れた。黄褐色の獅子<sup>64)</sup>が、〔赤毛馬と同じ〕薔薇

---

している [ペイルート版: 290頁注 4 ; *Ma'āṭir*, v. 2: 235-236]。

55) *adham*.

56) 校訂テキストでは *aw* (または) とあるが、L 写本および D2 [f. 128b], Ld [f. 91a] 両写本に従って *law* (もし) と読んだ。

57) ‘*Antara b. Šaddād*. 6世紀の詩に登場する伝説的人物。アラビア半島中央部のアブス族の戦士で、アラブ人の父と黒人奴隷の母の間に生まれたとされる。ここでは黒人の血を引く彼の肌の色が黒かったことを、黒毛の馬の毛色と関連付けている [“‘Antara,” EI2]。

58) *sawād*. 原義は「黒」だが、多数であること、豊富であることを表す。

59) 牝馬が良い子馬を産むことができる、という意味を含んでいる。

60) *kumayt*.

61) *ḥayy*. この語には「部族」という意味もある [*Hava*: 152]。

62) *ward*. 原義は「薔薇」。研究篇 [295頁] は *yellowish bay* (黄鹿毛) としており、粕毛の馬を指す場合もあるが [*Steingass/P*: 1462], ここでは原義との関連を重視して「赤毛」と訳した。

63) *aṭalla* には、「〔土が〕雨露で濡れる」、「〔血が〕流されるのを許す」といった意味がある [*Kazimirski*, v. 2: 92]。

64) *asad ward*. *ward* は、「黄褐色」ないし「黄褐色の獅子」を指す語でもある [*Steingass/A*: 1208; *Steingass/P*: 1462]。



(ward)〔色〕の名を赤毛馬と分け合うと、赤毛馬はその獅子〔の身の程〕を気遣う。ウルワ・ブン・アルワルド<sup>65)</sup>(ワルドの息子ウルワ)は赤毛に対して卑屈になり、〔父ワルドの息子としてではなく、〕母の息子としてしか呼ばれない。その許には、同血統の牝馬たちが存在する。そのひとつが白斑の赤毛牝馬で、それはあたかも、その表面で泡が白い歯を見せて笑う葡萄酒の如き〔赤色〕である。あるいは、新月が昇る黄昏の如き〔赤色〕である。新月の光輪のすべては金色で、それゆえに、この牝馬が競走の日に勝馬になるのは当然である。その牝馬により砂塵が舞い上がった天は、赤革の如き薔薇〔色〕を露わにしながら裂ける<sup>66)</sup>。

#### 栗毛<sup>67)</sup>

額に星をもつ栗毛は、燃え盛る松明の如く輝かしい<sup>68)</sup>。それは走り去らぬように、足枷で縛られていた。それはあたかも、稲妻がその白い外衣を奪ったかのようで、太陽はそのために止まり<sup>69)</sup>、〔その結果、〕星は輝く。栗毛が堅固な性格の徴を備えてやってくると、どんな勝馬も栗毛に先を越されることを認め、馬場では栗毛に従う。〔ms. 143a〕その側には栗毛牝馬が侍している。〔その牝馬は〕牡馬の火打ち錐から出る火花のように駆け、美しい栗毛とその兄弟の間にやって来たのだけれども。栗毛牝馬に対して〔打つ〕手が無い駿馬は、牝馬に近づくことはない。〔駿馬は〕「この栗毛牝馬は馬場とともにある」と言われても、〔牝馬と〕競うことはない。

#### 斑入り黄毛<sup>70)</sup>

金貨〔のごとき色〕に黒玉が張り付いているよう〔な毛並み〕であり、夕暮れの金色に夜の黒い筋が伸びているようである。それが望んだものはすべて手に入り、高貴な出自を持ち気高いが故に蔑ろにされることはない<sup>71)</sup>。

またそれには、競争相手を苦しませ「見る者を喜ばせる色鮮やかな黄色」〔の牝馬〕<sup>72)</sup>が近

65) ‘Urwa b. al-Ward. ジャーヒリーヤ時代のアラブ人詩人。父に比べて母の出自が低かったことから、彼は一族からイブン・アルガリーバ（よそ者の子）と呼ばれていた〔研究篇：295頁；“Urwa b. al-Ward,” EI2〕。一連の箇所は、赤毛馬以外のものがワルドの名を冠することの畏れ多さを描写している。

66) 『クルアーン』55章37節の、「天が裂け、赤革のような薔薇〔色〕となった時」を踏まえた表現。

67) ašqar.

68) aḡarrには「輝かしい」に加え、「額に白斑（星）を持つ馬」という意味もある。以下の描写は、栗毛の中でもとくに星を持つものの素晴らしさを説明している。

69) 「止まり」と訳した箇所は、校訂本では動詞 waqafat（止まった）の語頭の wa が接続詞のようにも見えるが、L 写本を含む諸写本およびペイルート版〔291頁〕に従い、動詞の直前に接続詞 wa を補って読んだ。

70) ašfar ḥabašī. カルカシャンディーは、当該馬をたてがみと尾のみが黒い馬であると説明している〔ペイルート版：291頁注4；*Ṣubḥ*, v. 2: 15-16〕が、John Lewis Burckhardt によると、ḥabašī の語は馬体と異なる色の斑がある馬を指して用いられる〔Burckhardt 1831, v. 1: 214〕。なおこの項目は校訂本では小見出の形となっていないが、他の項目に準じた。

71) L 写本, D1 写本 [f. 206b], D2 写本 [f. 129a], Sh 写本 [f. 177b] では、この箇所の次の語句 wa yudānī-hi（それに近づく）が小見出のような形で記されている。本訳でもこれ以降は斑入りではない黄毛牝馬の説明となっていると理解した。

72) 「見る者を喜ばせる色鮮やかな黄色」は『クルアーン』2章（雌牛章）69節の、神に捧げるべき雌牛について言及した一節。本文でもこの一文以降は牝馬に限った説明となっている。

づく。まるでその牝馬は鋳型に流し込まれた金か、マグリブのワルス〔の黄〕<sup>73)</sup>で染められたかのよう。神の支援を受けし軍勢はそれによって飾り立てられ、[txt. 330] それは軍勢の替馬たちを先導する。その黄毛牝馬は、まるで掲げられたスルタンの旗のよう<sup>74)</sup>。

駁毛<sup>75)</sup>

それは2着の外套を着ている者のようであり、正反対のふたつのものをひとつにまとめる者のようである。ただし、一方の外套は締めて、もう一方の外套は緩めている。駁毛の馬には昼日の〔白さの〕なかに夜闇が広がっている<sup>76)</sup>。

駁毛牝馬がそれに並ぶ。その斑のある範囲が均等で、それらはちょうどよい均衡で混ざりあうことで、完璧な美しさを示している。牝馬は望まれた通りになり、白と黒とが合わさることでその美しさは増したのだ。

### 側対歩の混血馬<sup>77)</sup>

それは遠い目的地に至るあらゆる勝馬であり、宦官であっても馬に任せて走らせればよい。それは、雄々しい熱気を混乱のない方へと集める。馬具 (ḥizām) が適した箇所では止められていなくても、それは馬具をつけて駆けるからである。それは側対歩 (mišyat al-mutamāyil) で進み、純血馬と似て非なるものでありながらも、他の〔純血〕馬に勝る。この馬にとっては、幾多の泥沼を通り過ぎることはいとも容易く<sup>78)</sup>、[ms. 143b] 山ヤギ (wa‘l) が苦労しても越えられないほどの幾多の山頂であってもいとも容易く越える。それは「黄色の一族」に根を有し、まさに金貨のようになった<sup>79)</sup>。それはルームでは松明の輝きを求め、まるで火のように燃え盛った。その背はとても低く窪んでいて、それに乗る者は安息が保証される。またそれは、険しい山道を越える際に、様々なアラブの駿馬よりも軽々と背中に乗せる。それがどれほど、そびえ立つ頂を鷹たちと共に飛び回ったことか。またどれほど、そこに住む者が上がってくることができると思えない谷底へと降りていったことか。それは水

73) wars. 辞書によってサフランやターメリック、クスノハガシワ、メメキロンなど様々な訳語が見られるが、いずれも黄色の染料となる植物である [cf. Bedevian : 379-380, 390-391]。しかしどれも特にマグリブに限って原生するものではなく、ここで「マグリブの」とあるのは黄色のイメージを強調するためだと考えられる。

74) 黄色はマムルーク朝を象徴する色の一つで、軍旗も黄色であった [訳注 (9) : 41頁注127 ; 訳注 (14) : 25頁]。

75) dū balaq.

76) 注71と同様、L写本、D1写本 [f. 206b], D2写本 [f. 129b], Sh写本 [f. 177b] では、この箇所の次の語句 wa yalī-hi (それに並ぶ) が小見出のような形で記されている。

77) al-akādīs al-rahāwīr. 本訳注22頁注39では himlāg と記されていた「側対歩」は、ここでは「速く静かに走る側対歩の馬」を意味するペルシア語 rāhwār の複数形に由来する rahāwīr と記されている [“rāhwār,” Steingass/P; “rāh-vār” 『新ペルシア語大辞典』]。写本でも全て rahāwīr と記されているが、バイルート版 [292頁] は al-rahāwīn (単数形は rahwān) と改めている。rahwān あるいは rahwān も側対歩の馬を意味する語である [Dozy, v. 1: 517, 564]。

78) この一節はムタナッビーの詩の一部を引用したもの [研究篇 : 295頁 ; ‘Ukbarī, v. 3: 5]。

79) 「黄色の一族」(banū al-aṣṣfar) は、ルーム (ローマ) の民の祖先がエチオピア人との混血であったという故事に基づき、一般にルームの人々を指す表現である [cf. 被造物の驚異 5 : 419頁]。当該箇所ではこの故事を踏まえ、混血馬が人口に膾炙する価値ある存在であることを示す表現として用いられている。訳注 (3) : 28頁注62も参照。

が下るように下り、また神に聞き入れられる祈願が昇るように昇り続け<sup>80)</sup>、天の諸門が開かれる。[txt. 331]

#### ラバ<sup>81)</sup>

それはなんと気高き雌ラバであろうか。価格は高くはなく、古き血統を誇るのでもないが、自らのみを誇るのである。彼女を扱ってみるとすべてが美点として見なされる。彼女にとっては、もし父方の家系（‘umūma）が劣っていたとしても、母方の家系（aḥwāl）の誉れという長所が〔それを〕補うであろう<sup>82)</sup>。彼女はウラマーに用意された〔乗るべき〕頂であり、カリフやワズィールや支配者のための〔乗るべき〕背である。奔流のように駆け出し、また優しく歩む。スハイル星<sup>83)</sup>が昇っても彼女は能力を失わない<sup>84)</sup>。馬には付きものの華やかさはないが、彼女は愉しみのためではなく、堅実に用いるために望まれる。〔止まれ、という〕警告を聞いたり、〔罰を受けながら〕弁解したり<sup>85)</sup>したかのように、彼女はじっと動かない。警戒しながら注意深く大地を踏むかのように、彼女は慎重である。そして彼女は最遠に到達する。他に先駆けたり、頬革（‘idār）を付けたりして駆けることは、彼女の得意とするところではないのだが。

#### ロバ<sup>86)</sup>

上エジプト産のロバ<sup>87)</sup>が彼のもとに遣わされた。ロバの乗り手が讃辞を受けることはないが、ロバは駿馬の高みに1指尺分足りないだけである。ロバの乗り手は常に落ちていていられる。ロバは至高なる神が言及した3種のうちの一つなのだから。「馬にせよ、ラバにせよ、ロバにせよ、お前たちが乗るために、また装飾として〔神は創った〕」[クルアーン：16章8節]。

ロバに乗れば遠い範囲に到達できる。ロバに乗って夜旅する者は[ms. 144a] どこでも望みの場所に向かえる。それはロバが上エジプトの産であればこそ<sup>88)</sup>。ロバの餌は少量でよく、ロバを持つ者は放牧してもロバについて心配はない。かつて預言者たちはロバの類に乗っていた。聖者たちはロバしか購入しなかった。ロバは怯えて暴走することは決してなく、広口

80) 「続け」と訳した箇所は、校訂本では fa-lā yazall と読めるが、写本は全て fa-lā yazālu としているため、本訳では後者の綴りに則して解釈した。

81) al-biḡāl. 牝馬と雄ロバの交雑種。繁殖力はない。

82) 母方の馬の血統の方が、父方のロバの血統よりも尊重されることを示している。

83) Suhayl. りゅうこつ座の主星カノープスのこと。訳注（1）43頁注78を参照せよ。

84) スハイル星の上昇（東昇）は、繁殖期にあたる秋の始まりを意味する [堀内勝2012：458頁；堀内勝2013：294－295頁]。繁殖力がないラバは繁殖期の影響を受けないため、この時期も他の時期同様に働くことができることを示している。

85) 『クルアーン』77章6節の「言い訳したり戒めたり」を踏まえた表現。脅威を目の当たりにして立ちすくんでいるありさまから、身動きしない状態を表したもの。

86) al-ḥumur.

87) ḥimār ṣa‘īdī. カルカシャンディール『夜盲の黎明』によると、最良のロバはエジプト産のもので、なかでも上エジプト地方（al-Ṣa‘īd）の産がその最上である [Ṣubḥ, v. 2：34]。

88) 『クルアーン』4章43節の「きれいな地面（al-ṣa‘īd）〔の砂〕を手で触れ、顔と手をこするがよい」という表現を踏まえたもの。「〔場所に）向かう」（tayammama）という語と同綴の「手で触れ」、またロバの産地である上エジプトと同綴の「地面」を掛けている。

の井戸<sup>89)</sup>から〔水を〕一飲みすれば満足する。その乗り手は、落ちたとしても地面までの距離を恐れはしない。ラバの美点のうちロバが欠くのは羨望のまなざし〔を浴びること〕のみである。ロバには、長旅において馬に望まれるものがあり、〔出立する人が〕ロバ連れであれば、見送る人は安心する。ロバこそが「背負いこむ書物」についての譬え〔に登場するもの〕であったからである<sup>90)</sup>。[txt. 332]

#### ラクダ<sup>91)</sup>

それには2種類があり、ふたコブ種<sup>92)</sup>とひとコブ種<sup>93)</sup>である。そしてひとコブ種は、乗用ラクダであり、荷駄運搬用ラクダでもある。目的を達するために、我らが、それによってどのような困難でもそれを〔思うままに〕導くラクダ、どのような仲間たちでもそれを乗せて同行するラクダが用意された。我らはそれらのうち、夜を旅する鼻輪、〔明け方の〕蜃気楼〔に向かって〕旅する船を前に進めた。その船は、水を切るような競走馬<sup>94)</sup>よりも〔速く〕蜃気楼の流水を切り進むことができる。我らはそれらのうち、一日の行程をより素早く進める乗用ラクダ、そして不毛の地を進むラクダのごとく流れゆく雲である乗用ラクダを選び抜いた。我らはそれらのうちの、手綱をつけた鳥であるものすべてを望み、かつ、また矢のごとき鞍を<sup>95)</sup>射放つ、弓のごとき引き締まった雌ラクダ<sup>96)</sup>であるものすべてを望んだ。それは山々の姿をもった雄ラクダである。それは細き枝を広げる大樹の揺れる姿をもった、素早く遷りゆく影である。風が、その軽さと競うべくもなく、それは大地において、自らの蹄に馬の蹄の〔地を穿つような〕動きをさせることもない。それが四脚を折り曲げると、大地に満月を記す。その周囲には馬の蹄からなるミフラーブ〔状の跡〕がある。

重い荷を運ぶ足取りで、すべてのヒーラのキリスト教徒<sup>97)</sup>はラクダ〔を牽いて〕ともに

89) ḡafr. 囲いのない広口の井戸。

90) 『クルアーン』62章5節「〔まず譬えてみようなら〕書物をたくさん背負い込んだロバといったところか」を踏まえ、「書物」の複数形 (asfār) を同綴の「旅」の複数形と掛けた表現。

91) al-ibil.

92) ‘uḡm. カルカシャンディーによれば、体型が粗野で、毛並みが長く、「テュルクの地」から到来する。バクトリア種 (sg. buḥt, pl. baḥātī) ととも呼ばれる [ペイルート版: 293頁注4; Ṣubḥ, v. 2: 30]。

93) ‘irāb. アラブ純血種の意味である [堀内勝1986: 4–5頁; 堀内勝2015: 42頁]。非アラブ種を意味する ‘uḡm と対比されている。

94) sawābiḥ. 「水に浮かぶもの」の意味で競走馬の比喻とされる。

95) 「鞍を」と訳した箇所は、校訂では bi-ḥi (その口を) とあるが、写本間の異同が大きい [校訂: 332頁注5]。本訳では、ペイルート版 [293頁] に従って bi-qatabi-ḥi と読んだ。

96) ḍāmīr. 「痩せた」という意味であるが、雌ラクダに対する美称として用いられ、また準備の整った競走馬を意味するためにも用いられる単語である [Lane: 1804]。

97) ‘Ibādī. 様々なアラブ部族からキリスト教に改宗し、イバードと称した者たちの集団 [ペイルート版: 294頁注1]。キリスト教信仰で有名な、イラク南部のナスル朝 (いわゆるラフム朝) の首都ヒーラの住人の3分の1は、このイバードの人びとであったと伝えられ、イバードの呼称は基本的に、このヒーラのキリスト教アラブを指すのに用いられたようである。裕福な階層として、その政治力でナスル朝の王家にも大きな影響を与えた [Toral-Niehoff 2010: 323-343]。イスラーム成立後のヒーラは、その近くに建設されたクーファ郊外のキリスト教徒地区として西暦10世紀まで残り、ムスリムには飲酒と放蕩のイメージで語られた [“Hīra,” EI3]。



あった<sup>98)</sup>。もしその足取りをアブダ・ブン・アッタビーブ<sup>99)</sup>が目にしたならば、それについて短い言葉を述べることもしかなかっただろう<sup>100)</sup>。あるいは、ラーイー<sup>101)</sup>であれば、その後、ラクダの乳房に残った乳 (šawl) を顧みることもなくなるだろう<sup>102)</sup>。あるいは、もしその姿がイブン・ザイヤーナ<sup>103)</sup>の庭を飾ったならば、[ms. 144b] 遠い放牧地へ逃げ去った<sup>104)</sup>ラクダがイブン・ザイヤーナに〔再び〕出会うこともなかったであろう。あるいは、イムルウ・アルカイス<sup>105)</sup>の乗用ラクダがその姿に守られていたならば、彼は非難する〔女性の〕言を聞くこともなかっただろう<sup>106)</sup>。それらのうち雄ラクダは、もし山がその一部でも運んだなら〔その重さでその山が〕二つに崩れてしまうがごときものを運び、夜旅の苦難にも、不平すら述べず苦痛も訴えずに耐える。それは、遊牧アラブの暮らす砂漠に慣れており、〔放牧で〕自由なものと旅に出されるものの間に区別がなく<sup>107)</sup>、乗り手が激しく駆ろうとも、自由にさせようとも気にすることがない。その体内では渴きに耐え、また〔主人に〕従わせられたときも、たとえラクダ〔自身〕がそれを望もうとも、誇り高い拒絶の力があるので、無力に陥ることはない。[txt. 333]

それに加えて、ふたコブ種であるバクトリア種<sup>108)</sup>がいる。〔それは〕星がそれとともに地平に沈んでしまうようなバサーリーク種<sup>109)</sup>の夜旅によって大地を渡り、その道々においては

98) ヒーラのキリスト教徒は通商で栄え、またそのラクダは品質の素晴らしさで有名であった。特にナスル朝最後の王ヌーマーンが育成したラクダ種は後世に大きな影響を与えた〔堀内勝1986: 29–34頁〕。ここでは、ヒーラのラクダが多くの交易品を運ぶ姿を称えて描写しているとみられる。

99) ‘Abda b. al-Ṭabīb. イスラーム以前から活動したアラブ詩人。イスラームの征服戦争に参加していたことで知られる。25/645–46年没〔研究篇: 295–296頁〕

100) この文は反実仮定の条件文であり、帰結節冒頭の動詞には *la* が接頭する。校訂では *la* が二つ付された形になっているが、L 写本など諸写本とペイルート版〔294頁〕に従い、*la-qaṣṣara* と読んだ。

101) al-Rā’ī. ‘Ubayd b. Ḥuṣayn b. Mu‘āwiya. al-Rā’ī al-Numayrī の名で知られる。ラクダに関する詩を多く呼んだことで知られ、このためラクダ飼い (al-Rā’ī) と呼ばれた。90/708–09年没〔ペイルート版: 294頁注3; 研究篇: 296頁〕。

102) ラーイーがラクダを詠うことをやめようという隠喩〔ペイルート版: 294頁注3〕。šawl という語は通常は「容器の中に残った水」という意味であるが、上記のペイルート版の注に従い、本文のように解釈した。

103) Ibn Zayyāna. 不詳。現在までのところ、特定の人物に同定されていない。

104) al-na‘am al-‘āzib. 主人の許から遠く離れた放牧地にいるラクダを指す。研究篇〔296頁〕には al-ni‘am al-‘āzib とあるが、ラクダを意味する語は na‘am が正しいため al-na‘am al-‘āzib と読んだ。

105) Imru’ al-Qays. 前イスラーム時代の詩人。アラビア半島キンダ朝の王であったと伝えられる。550年頃没〔“Imru’ al-Qays,” EI2〕。

106) イムルウ・アルカイスは入浴中の女性たちの服を隠したため彼女たちに非難されたが、その罪滅ぼしとして、自分の乗用ラクダを屠って食用に振る舞ったという故事を指すとみられる〔堀内勝2015: 358–360頁〕。

107) 遊牧アラブの飼育するラクダが、放牧状態であろうと旅に出ている間であろうと常に移動しており、定住状態で飼育されることがないことを示している。

108) buḥt. バクトリアのラクダの意〔Hava: 21; Lane: 158; Lisān, v. 1: 328〕。中央アジアからモンゴル高原を原産地とし、体が大きく頑強な種である〔堀内勝2015: 42頁〕。注92も参照。

109) basārīk. この語は、辞書をはじめ他の文献にほとんど見当たらず、語義を確定できない。校



岩をもならし、毛皮という飾りを持つためにそれに匹敵する衣服を必要としない。木の天蓋の持ち主たるベールを纏った貴婦人<sup>110)</sup>は、毛皮を誇りとする。それは強靱な魂を持ち、太陽のように東方から現れた。脚は短く、腿は引き締まり、あたかも待ち伏せた敵の奇襲に備えるがごとくで、〔その歩みは〕まるで豪雨のごとくに大地の諸地方に降り注ぐ<sup>111)</sup>。それは毛皮という首飾りや関節の美しさによって飾り付けられている。

放牧されたアラブのラクダ（ひとコブ種）たちは、ふたコブ種とともに歩かない。というのもアラブのラクダは、雲が嵐の天幕を広げて張るときには、ふたコブ種とともに旅しないからだ。彼らとともに泥道を進むことができないのである。アラブのラクダがふたコブ種とともに〔雷雨のなかを旅したならば、〕ふたコブ種が到着の実利を得た際も、空手形以外に得るものはない<sup>112)</sup>。アラブのラクダはふたコブ種から数歩離れている。ふたコブ種はアラブのラクダの姉妹のようなものだ。2種のラクダは類似してはいるものの、バクトリア種はアラブのラクダより幸運であるというよりも、独自の特性を持つことによって、優れているのである。

## 第2項 栄光に満ちた野生動物——肉食獣とその他の動物——<sup>113)</sup>

### 獅子<sup>114)</sup>

獅子が叢林に潜んで咆哮し、死を運命づけられた赤〔ms. 145a〕と黒<sup>115)</sup>が悲鳴の嘶きをあげると、そのかぎ爪は血に染まり、星座の鷲の三つの明るい星<sup>116)</sup>のように〔暗闇に閃いて、

---

訂者 al-Droubi も不詳と注記している〔校訂：333頁注1〕。ただし、ウマリーの大著 *Masālik* には、優れたラクダの一例としてこの語を付したラクダが言及されている〔*Masālik/DKI*, v. 5: 30〕。この語についてはこれ以上の情報は確認できないため、ひとまず優れたラクダの種名と解釈しておく。この解釈に基づく、ここでは、ラクダとともに星が空を移動し地平に沈むという情景により、健脚で知られるバサーリーク種の遥かな旅路が表現されていると考えられる。

110) 木の天蓋の持ち主たるベールを纏った貴婦人 (dawātu al-qibābi al-ḥaṣabi rabbātu al-kilali)。ここではラクダのこと。長毛種であるふたコブ種のふさふさした丸いコブと、祭礼の折などに飾り布をかけられた壮麗華美な木のドーム屋根が擬えられているのであろう。

111) 「降り注ぐ」と訳した動詞は、ṣabba の第7形女性単数未完了 (taṣabbu) と解釈したが、naṣaba の第1形女性単数未完了 (taṣubu) ならば、同じ綴りで「1日中歩き続ける」を意味する。ふたコブ種の歩みの力強さが、同綴の2単語を掛けた言葉遊びで表されていると考えられる。

112) 空手形以外に得るものはない (lā taḥṣulu ma'a-hā illā 'alā ḥawālāti al-muḥālī)。ḥawāla は遠隔地間の送金システムである〔“Ḥawāla,” EI2; “Ḥawāla,” EI3〕ため、この一文は荷が駄目になるか到着が期限よりも遅れることにより、送金された代金が受け取れなくなることを意味しているか。

113) ḡalīl al-waḥṣ: sibā'-h wa ḡayr sibā'-h.

114) al-asad.

115) 赤 (ḥumr) は「ロバ」と同根であり、黒 (sūd) は「群れ、集団」に通ずる。どちらも複数形であり、獅子の獲物を暗示していると解釈できる。

116) uṭfiya. 鍋を火にかける際に用いる、石などで作った三つの支えを意味するが、こと座 (Lyra) の特に明るい三つの星を指して使われることもある。アラブはこの星座を ṣalyāq と呼び、鷲に擬えた [Lane: 20, 1593]。なお、本章第1節第4項「旅の道具」では、鼎石と訳した〔訳注 (14) : 30–31頁〕。

獲物に〕襲い掛かった<sup>117)</sup>。そのはらわたは〔血への〕渴きに燃え、獅子であれば無分別は問題にならなかった。その見開いた目<sup>118)</sup>がぎろりと動き、そこに憤激の兆しが現れ、尾をたらし、座った獅子は称讃者に讃辞を急かした<sup>119)</sup>。まるで血の衣をまとったごとく、また天の獅子の下、かの叢林を我が物としたごとくであった。[txt. 334] その俊敏なる襲撃は死の運命を〔獲物に〕速やかにもたらし、獲物と死までの距離は短く、1 ズイラーしかない。もし仮に、アウワーム<sup>120)</sup>がその獲物とともにいたならば、アサド家 (Banū Asad) という自らの系譜を否定したことであろう。あるいはカスリーの父 (Abū al-Qasrī) [がいた] ならば、彼は自らの父祖に関する主張を誤った考えと見なしたことであろう<sup>121)</sup>。獅子は動かずしてかの叢林 (‘irrīsa) を守り、あらゆる獅子 (dirgām) は、棲処に立ち入ろうとする者をかの叢林から退けてきた。ゆえに誰しもがかの叢林を恐れたが、その叢林がなかったとすれば、ただ砂丘<sup>122)</sup> [のごとき獅子] だけが横たわっている。獅子が〔獅子の別名である〕ワルド (ward) と呼ばれて以来、薔薇 (ward) の話が出ると、誰しもが薔薇の匂いを嗅がずとも〔不吉な予感がして〕くしゃみをするようになった。

#### 豹<sup>123)</sup>

豹は向こうの丘のふもとから跳び出した。豹のごときものは「道を踏みはずした者」<sup>124)</sup> に呼ばれることはなく<sup>125)</sup>、絶望する者に向けて疾走することもない。豹は自らの皮をたくしあ

117) この部分の主語は *maḥāḡin* で、*mihḡan* の複数形。原義は「先端が鉤状になったもの」であるが、ここでは文脈からかぎ爪のことと解釈した。

118) *himlāq*. 脛の縁の内側、コフルで黒く塗る部分を指す [ペイルート版: 295頁注1]。ここでは脛の内側が見えるほどに目をむいて睨む様子が表現されていると解釈し、「見開いた目」と訳した。

119) 「称讃者」の原語は *wāṣif*. 長詩の導入部と主題部の間によく見られる、砂漠にいる野生動物の描写を通じて表現される讃辞としての情景詩 (*waṣf*) を詠むことが意図されていると考えられる。情景詩については、堀内勝1986 [69–72頁] を参照のこと。

120) *al-‘Awwām*. 恐らく *al-‘Awwām b. Ḥuwaylid* のこと。クライシュ族アサド家の出身。教友ズバイルの父であり、またムハンマドの妻ハディージャの兄弟でもある。なおアサド家は、ムハンマドの曾祖父ハーシムの従兄弟であるアサドを名祖とするクライシュ族の氏族である [高野太輔2008: 33頁]。

121) このカスリーは、ウマイヤ朝末期のイラク総督 *Ḥālid b. ‘Abd Allāh al-Qasrī* か。アブー・アルファラジュ・イスバハーニーの『歌の書』に記録されている逸話がこの一文の典拠かもしれない。その逸話は *Ḥālid al-Qasrī* が逃亡奴隷の子孫であると伝えるが、同じ逸話の中で *Ḥālid* の父 *‘Abd Allāh* は「私は *Asad b. Kurz* の子孫であり、我々〔一族〕は月〔の暦〕に責任を負い、時に食事を供する人々である」と父祖である *Asad* の名を出しつつ奴隷の出自を否定する趣旨の発言をしている [Agānī, v. 19: 57–58]。‘*Abd Allāh* が言う「月に責任を負う」の意味するところは判然としないが、ジャーヒリーヤ時代に存在した暦を管理する（太陰暦と太陽暦とのずれを調整する）職務を指しているのかもしれない [医王秀行2012: 112–134頁]。

122) 校訂テキストでは *al-ka’īb* とあるが、334頁注7にあるようにこの語の表記は写本によって異なっている。獅子の色や生態を適切に表現していると考え、S1写本 [f. 215a] および Sh 写本 [f. 180a] に従って *al-ka’īb* と読む。

123) *al-namir*.

124) *qāṣiṭ*. 『クルアーン』72章14節ならびに15節に、複数形 (*al-qāṣiṭūn*) ではあるが、この語が使用されている。

125) この一文には、アラブの一部族である *Namir b. Qāṣiṭ* 族の名称が組み込まれている。ナミル・ブン・カーサイト族は、ラビーア族の下位集団で、同じくラビーア族の下位集団であるタ

げ〔て準備を整え〕、行きたがっていると思わせながら立ち止まっている。豹の斑の色は〔人を〕警戒させ、腰帯を締めた〔ように細い〕その腰に目をやれば、斑点 (kalaf) のひとつひとつが腰の優美さを損なっている。豹の許で善き事は期待されず、豹の眼前から軽やかに逃れることも望めない。豹は、山を跳び越すことを望みさえすれば、跳び越したことであろう。あるいは、物言わぬ巨大な岩を破壊することを望み、またその音が聞こえたとすれば、「必然であった」と言われたことであろう。「豹に気をつけろ」という警告は無駄であり、高き壁であっても豹と獲物たる家畜の間を隔てることはできない。屈強な男さえ豹の斑模様を恐れ、斑模様が肉片 (kasīra) の血であると思ひ込む。[ms. 145b]

#### 狼<sup>126)</sup>

以下のように言われている。「リワーの窪地<sup>127)</sup>には狼がいる」。狼はあらゆる放牧された家畜 (sā'ima) を脅かし、あらゆる動き回る〔家畜〕(hā'ima) を各々の棲処へと追い込んだ。狼は放牧された家畜 (sarḥ) を脅かすと、長引かせることなくその群れを襲撃し、恐るべきことをおこない、その家畜の群れを分断するまで引き返さなかった。[txt. 335] その見開いた目 (ḥimlāq) はランプの燃焼のように燃え盛り、その肢体は湾のうねりのように波立った。その毛皮は〔自身の〕瘦せた体を覆い隠し、そのかぎ爪は針で縫ったものを引き裂いた。しばしば、狼は〔家畜が〕牧草を探すこと (nuḡ'a) を困難にし、夜に〔家畜が〕寝静まった後にやって来た。そして、〔家畜は〕その艶やかな頬に魅了され、大食漢 (akīl) の食卓に載せられた。さらに、〔狼は〕ときには〔次の獲物を求めて〕徘徊した。あらゆる錦織 (dībāḡ) は狼ゆえに嫌悪される。錦織が〔狼と同じく〕「アトラス」<sup>128)</sup>と呼ばれるために。

#### 象<sup>129)</sup>

象は、あたかも昼間のことを笑う夜のようなものである。また、あたかも山 (ṭawd) のようであり、象の鼻は山が崩れ〔て生じ〕た縁 (šafir munhār) のようである。〔また、〕袖を振って踊りつつやって来る踊り手、あるいは大地に接吻しながら進み、王の許へとやって来る者 (dāḥil) のようである。象には、並び立つものを思いつかないほどの牙 (nāb) がある。〔雷〕雲の中でその牙の稲妻が輝き、夜にその流星が降り注ぐ<sup>130)</sup>。〔その体は〕石と鉄を石膏で固めた (mašīd) 建造物〔のよう〕であり、象と競い合う〔ことができるほど〕大きな建物はな

グリブ族らとともにジャーヒリーヤ時代からジャズイーラ地方に進出していた [高野太輔 2008 : 44-47頁]。

126) al-dī'b.

127) Mun'araḡ al-Liwā. スライム族が縄張りとする涸れ谷のひとつ ["al- Liwā," *Buldān*]. スライム族は、ナジュド地方のハッラ・スライム周辺に居住していたアラブ部族 [高野太輔 2008 : 41頁]。

128) atlas. 通常この単語は「サテン布」という意味で使用されることが多いが、他にも「徐々に毛が抜けてしまった狼、黒に近い灰色の狼」という意味もある [Lane: 1867]。ここでは、上記二つの意味を踏まえて、「錦織」の一種である「サテン布」を表すアラビア語 atlas が、人々から嫌悪される「狼」をも意味することを表現していると解することができる。

129) al-fīl.

130) ここでは、灰色の象の体の中で白い牙が輝いて見える様を、「雷雲の中に生じる稲妻」や「夜空を翔ける流星」に喩えていると考えられる。

い。4本の柱の上で<sup>131)</sup>強固である。〔その鼻は〕酔っ払い (sagrān) のようにうねり，蛇 (tub‘ān) のように左右に揺れ動く。人間のように飛び跳ね，ジンのように〔人々を〕恐れさせる。〔象は〕統治されるものを統治するもの，従属するものを従属させるもの，服従するものを服従させるもの〔である。〕その両目の間では大蛇<sup>132)</sup>が勇敢さを示し<sup>133)</sup>，その背中にいくつかの城塞を載せて運びながら戦争へと急ぐ。

131) 校訂本では記載されていないが，諸写本の記述に従って ‘alā (～の上で) を補って読んだ。

132) šuḡā‘. ここでは，象の鼻をその形状から大蛇に喩えている。なお，この語には「大蛇」という名詞の意味だけでなく，「勇敢な」という形容詞の意味もある。

133) 校訂本では bal となっているが，全ての写本の記述に従って，この語を「勇敢である」という意味の動詞 baṭula と読み替えた。前注で挙げた，šuḡā‘ が持つ形容詞の意味に掛けていると考えられる。

## 参考文献および略称

### 『高貴なる用語の解説』 活字本

al-‘Umarī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. Yaḥyā b. Faḍl Allāh. *al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. (『高貴なる用語』)

校訂: *al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf l-Ibn Faḍl Allāh al-‘Umarī*. (Vol. 2 of *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh’s Manual of Secretaryship “al-Ta‘rīf bi’l-muṣṭalaḥ al-sharīf.”*)  
Ed. Samir al-Droubi. al-Karak: Mu‘ta University, 1992.

ペイルート版: *al-Ta‘rīf bi-al-muṣṭalaḥ al-šarīf*. Ed. Muḥammad Ḥusayn Šams al-Dīn. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, 1988.

### 『高貴なる用語の解説』 写本

B: Ms. 8639. Deutsche Staatsbibliothek, Berlin.

D1: Ms. Adab 57. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

D2: Ms. Adab 2134. Dār al-Kutub al-Miṣrīya, al-Qāhira.

F: Ms. Arabe 5872. Bibliothèque Nationale, Paris.

L: Ms. 659. Karl Marx Universität, Leipzig. (底本)

Ld: Ms. Or. 352. Universiteit Leiden, Leiden.

S1: Ms. Árabe 1639. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

S2: Ms. Árabe 1640. Real Biblioteca del Monasterio, Escorial.

Sh: Ms. Add. 7466 Rich. British Library, London.

### 『高貴なる用語の解説』 訳注

訳注 (1): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (1)」『史窓』 67号 (2010年): 27–65頁.

訳注 (2): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (2)」『史窓』 68号 (2011年): 51–94頁.

訳注 (3): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (3)」『史窓』 69号 (2012年): 19–53頁.

訳注 (4): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (4)」『史窓』 70号 (2013年): 31–49頁.

訳注 (5): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (5)」『史窓』 71号 (2014年): 1–24頁.

訳注 (6): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (6)」『史窓』 72号 (2015年): 63–79頁.

訳注 (7): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (7)」『史窓』 74号 (2017年): 1–25頁.

訳注 (8): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (8)」『史窓』 75号 (2018年): 23–44頁.

訳注 (9): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (9)」『史窓』 76号 (2019年): 21–51頁.

訳注 (10): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (10)」『史窓』 77号 (2020年): 25–45頁.

訳注 (11): 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』 訳注 (11)」『史窓』 78号 (2021年): 115–145頁.



訳注 (12) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (12)」『史窓』79号 (2022年) 21-50頁。

訳注 (13) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (13)」『史窓』80号 (2023年) : 45-61頁。

訳注 (14) : 谷口淳一編「アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注 (14)」『史窓』81号 (2024年) : 19-40頁。

#### 辞典類

岩波イスラーム辞典 : 大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002年。

新ペルシア語大辞典 : 黒柳恒男『新ペルシア語大辞典』大学書林, 2002年。

*Bedevian*: Bedevian, Armenag K. *Illustrated Polyglottic Dictionary of Plant Names in Latin, Arabic, Armenian, English, French, German, Italian and Turkish Languages*. Cairo: Argus and Papazian Presses, 1936.

*Dozy*: Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Supplément aux dictionnaires arabes*. 2vols. Leyde: E. J. Brill, 1881. Beyrouth: Librairie du Liban, 1981.

*Hava*: Hava, J. G. *Al-Faraid*. 1899. Beirut: Dār al-Mašriq, 1982.

*Kazimirski*: Kazimirski, Biberstein. *Dictionnaire arabe-français*. 2vols. Paris: Maisonneuve, 1860. Beyrouth: Librairie du Liban, n. d.

*Lane*: Lane, Edward William. *Arabic-English Lexicon*. 8vols. London, 1863-1893. Revised ed. 2vols. 1984. Cambridge: The Islamic Texts Society, 2003.

*Lisān*: Ibn Manẓūr, Ġamāl al-Dīn Abū al-Faḍl Muḥammad b. Mukarram. *Lisān al-‘arab*. Ed. ‘Alī Šīrī. 18vols. Bayrūt: Dār Ihya’ al-Turāṭ al-‘Arabī, 1988.

*Steingass/A*: Steingass, Joseph Francis. *A Learner’s Arabic-English Dictionary*. London, 1884. Beirut: Librairie du Liban, 1978.

*Steingass/P*: Steingass, Francis Joseph. *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. London, 1892.

EI2: Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960-2009.

EI3: Gaborieau, Marc, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam, Three*. Leiden: Brill, 2007-.

#### 史料・史料訳注

クルアーン (井筒訳) : 『コーラン』井筒俊彦訳, 改版. 全3冊, 岩波書店〈岩波文庫〉, 1964年。

クルアーン (中田ほか訳) : 『日垂対訳クルアーン』中田香織・下村佳州紀訳, 中田考監修, 作品社, 2014年。

クルアーン (藤本ほか訳) : 『コーラン』藤本勝次ほか訳. 全2冊, 中央公論新社〈中公クラシックス〉, 2002年。

クルアーン (三田訳) : 『日垂対訳・注解 聖クルアーン』[三田了一訳], 改訂版, 日本ムスリム協会, 1982年。

被造物の驚異 5 : 守川知子監訳・ペルシア語百科全書研究会訳「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースイー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(5)」『イスラーム世界研究』5巻1・2号 (2012年) : 365-494頁。

*Agānī*: Abū al-Farağ al-Iṣbahānī. *Kitāb al-Agānī*. Ed. Aḥmad al-Šinqīṭī. 25 vols. al-Qāhira: Maṭba‘at al-Taqaḍdum, [1905].

*Buldān*: al-Ḥamawī, Šihāb al-Dīn Yāqūt b. ‘Abd Allāh. *Mu‘ğam al-buldān*. Ed. F. Wüstenfeld. 6vols. Leipzig: Der deutschen morgenländischen Gesellschaft, 1866-1873. Tehrān, 1965.

*Ma‘āṭir*: al-Qalqašandī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. ‘Alī. *Ma‘āṭir al-ināfa fī ma‘ālim al-ḥilāfa*. Ed. ‘Abd al-Sattār Aḥmad Farrāğ. 3 vols. Bayrūt: ‘Ālam al-Kutub, 1964.

*Masālik/DKI*: al-‘Umarī, Šihāb al-Dīn Aḥmad b. Yaḥyā b. Faḍl Allāh. *Masālik al-abṣār fī*

*mamālik al-amṣār*. Ed. Kāmil Salmān al-Ġubūrī. 27 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya, 2010.

*Ṣubḥ*: al-Qalqaṣandī, Ṣihāb al-Dīn Aḥmad b. ‘Alī. *Ṣubḥ al-a‘šā fī ṣinā‘at al-inṣā’*. 14 vols. al-Qāhira, 1913-1920. al-Qāhira: Wizārat al-Ṭaqāfa wa al-Irṣād al-Qawmī, 1963.

*Tārīḥ Dimašq*: Ibn ‘Asākir, Abū al-Qāsim ‘Alī b. al-Ḥasan. *Tārīḥ madīnat Dimašq*. Ed. ‘Umar b. Ġarāma al-‘Amrawī. 80vols. Bayrūt: Dār al-Fikr, 1995-2001.

‘*Ukbarī*: al-‘Ukbarī, Abū al-Baqā’ ‘Abd Allāh b. al-Ḥasan. *Dīwān Abī al-Ṭayyib al-Mutanabbī bi-Ṣarḥ Abī al-Baqā’ al-‘Ukbarī al-musammā bi-al-Tibyān fī ṣarḥ al-dīwān*. Ed. Ibrāhīm al-Abyārī, et. al. 4vols. in 2. Bayrūt: Dār al-Ma‘rifa, [1978].

## 研究

医王秀行『預言者ムハンマドとアラブ社会——信仰・暦・巡礼・交易・税からイスラム化の時代を読み解く——』福村出版, 2012年.

高野太輔『アラブ系譜体系の誕生と発展』(山川歴史モノグラフ16) 山川出版社, 2008年.

堀内勝『ラクダの文化誌——アラブ家畜文化考——』リプロポート, 1986年.

堀内勝「星と動物(3)——獣帯(黄道12宮)の天秤・蠍・射手—アラブ・イスラム世界のフォークロア——」『アリーナ』14(2012年): 1-86頁.

堀内勝「星と動物(4)——獣帯(黄道12宮)のヤギ・水瓶・魚—アラブ・イスラム世界のフォークロア——」『アリーナ』15(2013年): 1-95頁.

堀内勝『ラクダの跡——アラブ基層文化を求めて——』第三書館, 2015年.

Burckhardt, John Lewis. *Notes on the Bedouins and Wahābys: Collected during His Travels in the East*. 2 vols. London: Henry Colburn and R. Bentley, 1831.

al-Droubi, Samir. *A Critical Edition of and Study on Ibn Faḍl Allāh’s Manual of Secretaryship “al-Ta’rīf bi’l-muṣṭalah al-sharīf.”* 2vols. al-Karak: Mu’ta University, 1992. (『高貴なる用語』のテキストが収められている巻は「校訂」, 作品研究の巻は「研究篇」と略称。)

Gacek, Adam. *The Arabic Manuscript Tradition: A Glossary of Technical Terms and Bibliography*, Leiden et al.: Brill, 2001.

Toral-Niehoff, Isabel. “The ‘Ibād of al-Ḥīra: An Arab Christian Community in Late Antique Iraq.” *The Qur’ān in Context: Historical and Literary Investigations into the Qur’ānic Milieu*. Ed. Angelica Neuwirth, Michael Marx and Nicolai Sinai. Leiden: Brill, 2010: 323-348.

Watson, Janet C.E., ed. *Lexicon of Arabic Horse Terminology*. London, 1996. London and New York: Routledge, 2016.